1．飛夢（とむ）

都心から少し離れた地下鉄の駅を出る。

通称『岡（ヒルズ）』と呼ばれるこの町は、最近になってお洒落な町として注目を浴びるようになった。

「えっと。……ここで、いいんだよな？」

そう言いながら、一人の少年が首からぶら下げた今時のガラ携とにらめっこしている。

どうやらウェブの地図を必死に調べているらしい。

困りきった顔で、まぶしい午後の太陽と同じ方向を見上げる視線の先には。

まるでネズミーランドのサンドリヨン城のような造りの、七・八階建てのビルがデデーンと聳（そび）え建っていた。

太陽の光に溶けてしまっているその建物のてっぺんから一階まで、改めてじっくり見つめても、その城に看板らしきものはついていない。

「やっぱ、ここだよなあ……」

もう一度ウェブを検索し直してみるが、調べ直したはずの目印の旗印はさっきと同じ場所を指している。

もう一度、中をのぞき込んで、思い切ってその建物の中に入ってみることにした。

レトロなつくりの回転ドアを押す。

月の透かし模様になっているガラスのドアはゆっくりと回ってためらう背中を押す。

おそるおそる入ったエントランスは、大理石の床が広がっていて、まさに『お城』なフンイキだった。

天井は高く、三階まで吹き抜けていて、どっかの怪人がぶら下がりそうな豪華なシャンデリアが輝いている。

右手には床と同じ、大理石造りの階段が二階まで続いていた。

一階の奥には、ネイルサロンや香水を売っている店があるらしく、良い匂いと女性客であふれていた。

正直、居づらい。

猛烈にそぐわない、自分が。

何だか自分がじろじろと見られているような気がして、肩身の狭い思いで取りあえず隅っこの壁に寄って立つ。空色のディパックをごそごそとやり、何やら冊子を取り出した。

「ここで、いいんだよな？　やっぱり……」

その冊子の一カ所と携帯の地図をしつこくチェック。

だけど、これから自分が面接に行こうと思っている店のイメージと、今自分の居るここが、頭の中でいっせいに正反対の方向に駆け出して、いっこうに繋（つな）がらない。

思う存分チェックしてみるが、やはり自分は間違っていないらしい。

「よっし」

そう小さくつぶやいてディパックに求人誌を詰め込むと、もう一度肩紐を閉めなおし、階段を一歩一歩踏みしめ上がっていった。

二階にあがると、今度は門番の立っていそうなデカいドアが行く手をさえぎる。

「……」

と、ドアと見つめ合ってみても、ドアは何も答えてはくれない。

見つめて気付いたのは、真鍮（しんちゅう）製の凝った細工のノッカーにも月があしらわれてる事。

かと言って、そのノッカーを鳴らす勇気と覚悟はまだ出てこなかった。

もう一度、携帯で位置確認をしようとドアから少し離れたとき、一階から人が上がってくるのが見える。

それは、この建物に入って初めて見る男性の姿だった。

何だかほっとしたのも束の間、刺繍の入った紫紺の開襟シャツ

に黒のスラックスを着たその長身の男性は彼には全く興味を示さずドアを開けてそのまま中に入ろうとする。
「あっ、あのっ……スミマセン」
こんなチャンスは二度とない……かもしれない。
慌ててここに入ってから初めて会った同性に声をかけた。
「何だ、わんこ。何か用か？」
キャラメル色の直毛の茶髪の下から、まだあどけなさの残る、くりくりっとした元気そうな瞳が二つ、ちょっと不安げにじっと自分を見上げている。
それらがいかにもな濃紺のリクルートスーツと爽やかな水色のカッターに包まれているのだから、まさに初々しい。
二十四・五に見えるその青年は的確な呼び名で彼を呼んだ。
『わんこ？』
一瞬ちょっと引っかかったものの、今はそれどころぢゃない。
「あの……『琥珀の月』って……」
自分の続けたかった言葉を青年は瞬時に理解した。
「ああ、ここだ。わんこ。面接か？」
「あ、はい。そうデス」
ぴょこりと元気よく頭を下げる彼を背に、青年はドアをためらいなく押し開けた。
「こっちだ。ついてこい、わんこ」
ドアを大きく押し開け、中から手招きをする。彼は慌てて青年に続いた。
中に入ると、ホテルのようなフロントと、ちょっとした待合い用に椅子が幾つか並んでいる。その奥には応接セットのような物が置いてある。営業前でまだ灯りが点いていないのでよく見えないが、そこがフロアーだろう。
「そこに呼び鈴があるだろ？　それを押してみろ。誰か出てくるだろ？」
そう言って青年は目線でフロントのカウンターにあるクラッシックな呼び鈴を示した。
「あっ……ありがとうございマスっ」
また、バネ仕掛けのようにぴょこりと頭を下げる彼に青年は薄く笑ってから
「じゃあな、わんこ」
ポンとからかうように彼の頭を軽く撫で、それだけ言って奥に消えようとする。
「……何っスか？　その『わんこ』って？」
とうとう彼はずっと思い続けていた疑問を青年に投げつけてみた。
「何って……」
青年はさも不思議そうに首を傾げると
「お前、だろ？」
っとにやっと笑った。
『わんこ→犬？→俺？？＝からかわれた！』
彼の表情から、思考回路が簡単に見て取れる。どうやら感情がはっきり顔に出るタイプらしい。
「何だよ！　『わんこ』じゃねえ！」
反論する彼に、青年ははは、と笑って奥へと消えていった。
「……何だよ、馬鹿にしやがって！」
不満気に唇を尖らせながらも、彼は思い出したように携帯の時間を見る。
約束の午後三時の二十分前。
小さくため息をついて気持ちを切り替えると彼はフロントの呼び鈴を鳴らした。
「……チン……」
思ったより、小さな音だった。
『あ……。もしかして、聞こえねかったかな？』
もう一度鳴らそうかどうしようかと迷っている間に、フロントの奥から人が現れた。

「……大変申し訳ありません、お客様、只今準備中でして……」
柔らかい声と物腰と共に、メガネをかけた
青年が出てくる。
白いカッターに黒のネクタイ。黒のスラックス、黒いギャルソンエプロンという格好だ
った。
背は自分よりちょっとだけ低い。
「あっ、こっ、こんにちわ、あっ、あの、俺……」
緊張の余りどもりまくってしまう。
メガネの青年は優しく続けた。
「……ああ、もしかして面接の方ですか？　では、こちらへどうぞ」
見るからにアタマが良さそうなその青年は、フロントから出てきて客席へと案内してくれた。
客室はムーディーランプに浮かび上がる。
「……あいにく、オーナーがまだ見えられてないんですよ。もう少し、こちらでお待ち下さいね」
優しい丁寧な口調でそう続ける。
一番手前の、深い海を連想させる色の応接椅子に、すすめられるままに腰を下ろした。
「はい、シツレいしまス！」
緊張の余り声がひっくり返ってしまいそうになるのを必死にこらえ、ギクシャクとふかふかの革張りの椅子に浅く腰掛ける。
自分でも、ロボットみたいな座り方だと思った。
「ああ、僕はしがないキッチンですから、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ？」
その様子にメガネの青年はくすりと優しく笑ってから一度バックヤードへ消え、お茶を持ってきてくれる。
いつもにこにこ、穏やかな微笑みを絶やす事のない青年。メガネの下の素顔は聡く整っていることが分かる。また、メガネがよく似合う顔立ちをしていた。
『しがないキッチンでもこのレベルなのか』
もともとあんまりない自信が、またしおしおとしおれてしまいそうだ。それが緊張となって跳ね返ってきてしまう。
お茶を手際よくいれながら、青年はピークに達している彼の緊張をほぐすように話を続けてくれた。
「……でも、良くここがわかりましたね？　たくさんテナントが入っていますし、看板も上げていないので、良くお客様からも『近くまで来たけど分からない』って場所を尋ねられるんですよ」
「あ……、俺も最初は分かんなかったッスけど……ちょうどここの人が通りかかってくれて……声をかけたら案内してくれました」
「そうですか？　誰でしょうね？　どんな人でした？」
お茶請けの和菓子を勧めながら、青年は首を傾げた。
「えと……背が俺より少し高くて……高そ、あ、イヤ、上品そうな濃い紫の服と黒いズボン履いてました」
「ああ、それなら……」
青年は謎が解けた名探偵のように、にこりと笑うとぽん、と手を叩く。
「きっとそれは紫亜（しあ）ですね。彼、このクラブで一番優しいと人気の高い方なんですよ」
『優しい？』
何だか頭の中に？が浮かんだものの、彼はこく、と頷（うなず）いてメガネの青年にもう一度名前を聞き直した。後でお礼を言う機会があるかもしれない。
「『しあ』さん、って言うんですか？」
「はい。あ、もちろん、『源氏名』といって、ここでの芸名みたいなものですけどね」

そこまで話した時に、まだ暗いカウンターの奥から声がかけられた。
「面接か？　櫂（かい）」
怒っているのか、ぶっきらぼうな錆びた声が高い位置から降ってくる。
「ショーン、すみません、忙しかったですか？」
「いや。別に」
「あっ、あのっ、俺……」
慌てて立ち上がって挨拶しようとする彼をショーンと呼ばれた青年はちら見しただけで不機嫌そうに続けた。
「慌てるな。俺もオーナーじゃない」
「……っ、スミマセン……」
一瞬、怒られたのかと思って謝ってみたものの、どうもそうではないらしい。
「ああ、彼はバーテンダーの『ショーン』です。彼の作るカクテルは格別ですよ」
そう言って、メガネの青年は嬉しそうに微笑む。
「あ、よろシクお願いしマス」
ぺこりと頭を下げる彼をショーンはこくりと小さく頷いただけで、後は全く無視。
『櫂』と呼んだメガネの青年と仕事の伝達などを会話していく。
後は黙って待ってみるしかなかった。
よく見ると、ここの制服なのか、櫂とおそろいの服を着ていた。
ショーンもすらりと背が高い。
どういうブリーチの仕方をしているのか、綺麗な銀髪。目はカラコンなのか、エメラルドグリーンだった。
リュウチョウに日本語を喋ってはいるが、もしかしたらこの背の高さと肌の白さはガイジンさんかもしれない。
「履歴書」
不意にショーンがそう言った。

だが、櫂（かい）に向けられる口調とまったく一緒だったので、最初は自分に向けられた言葉だとは気付かない。
「おい、履歴書。持ってきてるんだろ？」
突き出されたショーンの手と、不機嫌そうな声に、その問いがようやく自分に向けられているとわかった。
感情の薄い瞳が自分を見下ろしている。「あ、ハイ」
慌てて背広の内ポケットをごそごそやると、履歴書在中の封筒を取り出す。
受け取ったショーンは向かいの席にどっかと腰を下ろすと、履歴書を広げてみせる。
「見せてもらってもいいですか？」
櫂はその隣に腰掛けると遠慮がちにのぞき込んだ。
つくづく腰の低い男だ。
「飛夢（とむ）……くんと読むんですね？　すてきな名前ですね」
櫂はそう言ってにこりと笑う。
ちょっと変わった名前なのだが、飛夢は母親のつけてくれたこの自分の名前が好きだった。褒められるとちょっと嬉しくなる。
「あ、ありがとうございます」
「二十歳（ハタチ）、ね。本当か？」
ショーンがその気持ちに水をさす。
童顔で、夜町を歩いていると、未だに補導されそうになることも事実だった。
「あ、ハイ、俺、免許持ってきました」
だからこそいつも持っている、自動二輪の免許証をディパックからとりだす。
「コピー、取らせてもらうぞ」
「ハイ」
飛夢（とむ）はこくりと頷いた。櫂（かい）はショーンからそれを受け取ると、事務室があるらしいカウンターの後ろのバック

ヤードへと消える。
ショーンは再び、履歴書にちらと目を落として、一言。
「中卒か？」
「……。」
苦いつばがじわりと沸いてきた。
「……はい……」
つい、返事をする声が小さくなる。
『ああ、ここもダメか……』
自分でもがくりと肩が落ちるのが分かる。
『馬鹿だ、俺……何期待してたんだろ？』
思わず飛夢の口からため息が出る。
「……求人誌には身長とハタチ以上としか書いてねかったから、ダイジョウブかと思って来たんッスけど……仕方……ないっスね」
もう一度ため息をついたら諦めがついた。
何かを吹っ切って立ち上がった飛夢を意外にもショーンが止める。
「待て、どこに行く？」
彼はそう言って飛夢の腕をぐいと掴むと、もう一度椅子に座らせた。
「飛夢君？」
バックヤードから戻ってきた櫂（かい）も慌てて、だが、穏やかな口調で飛夢を引き留める。
「決めるのは僕らではありませんからね？　オーナーが来られるのを待ってみられてはいかがですか？　ね？　ほら、ちょうどコーヒーとケーキも用意してきたんですよ？」
「あ、すみません……」
コーヒーとケーキに釣られた訳ではない。
ただ、櫂の優しい気持ちが嬉しかった。
飛夢は勧められた椅子にもう一度戻った。
「……あ、ほら、もういらっしゃったようですよ？」
玄関の方に気配がして、櫂はそう言って玄関の方に顔を向ける。
確かに、人影が。
その影はゆったりとした歩みで、玄関からゆっくりと店内に入ってくる。
飛夢の緊張は一気にピークに達した。
「こっ、コンニチワ。今日面接していただく事になってる津崎飛夢デスっ。ヨロシクお願いしまスッ！」
来ていきなりの気合いの入った挨拶にオーナーはびっくりしたように立ち止まる。
飛夢はペコリと頭を下げ、オーナーの顔をおそるおそる見上げた。
１８０センチの自分よりちょっとだけ背が高い。飛夢にも一目で高そうだと分かるダークグレーのスーツに、藤色のカッターを着ていた。柔らかに流れる焦げ茶の長い髪が、ふわりと上品な顔立ちを覆っている。
そして、ゆっくりと優しそうな瞳が穏やかに飛夢に向けられた。
ホストクラブの店長なんて、どうせそんなところだろうと思っていたのだが……。
何だか、一昔前に世間を賑わせた韓流スターみたく……
いや、それ以上に上品に見える。
「ふふ、元気がいいね。どうぞ、かけてくれたまえ」
うっとりするほど甘い声が、飛夢の耳にしみこんだ。
飛夢はぽかんと口をあけてオーナーの顔を見つめてしまった。
「……私の顔に何かついているのかな？」
別に気を悪くした風でもなく、オーナーはくすりと笑ってフリーズした飛夢（とむ）にそう声をかける。
「あっ、はいっ、スミマセン！　シツレいしまス」
飛夢は慌てて目を逸らすと椅子に腰掛けた。自分でも顔が赤くなっているのが分かった。

『そうだよな、こんな男性（ひと）から優しく声なんかかけられたら、どんな女だってイチコロだよな』
オドロキを胸にしまう。飛夢は慌てて椅子に腰掛け直して背筋を伸ばした。
ショーンから履歴書を、櫂（かい）からはコーヒーを受け取りながら、オーナーは向かいのソファーにゆったりと腰掛ける。
その後ろにショーンと櫂が立った。
さっと履歴書に目を通しながら、穏やかな声でオーナーは言葉を続ける。
「……君はどうしてここを選んだのかな？」
早速の核心。飛夢は膝の上の拳をぎゅっと握り締めた。いやに湿っぽいのがわかる。
「……時給がいいからです」
余りに素直すぎる答えに、ショーンと櫂は顔を見合わす。
だが、当の店長は「ふむ」と頷いただけだった。
「お金を稼ぎたいのかい？」
「はい」
全く悪びれた様子もなく、元気のいい答えが返ってくる。
「……ご両親は、ここのことを知っているのかな？」
「……」
オーナーの問いに飛夢は少し迷った。
だが、変に取り繕ったり、ましてやウソつくなんか性に合わない。
飛夢は全部を話すと心を決めた。
なぜか、このオーナーには話しても大丈夫な気がした。
「……俺……中一の時に病気で母親亡くしてから、十六までずっと施設で育ったんデス。飲んだくれだったチチオヤは今どこにいるかも分からねぇし……。中学卒業してからは、自分で稼がなきゃならなくて……。いろいろバイトとかもしたけど、中卒じゃハタラくとこもねくて……せめて、夜学と車校に通う金くらい、自分で稼ぎたいんデス！」
一気にそう言ってしまったら、何だかすっきりした。これでダメでも多分悔いはない。
「……それは……。すまない事を聞いたね」
それは、今まで飛夢（とむ）が他人に向けられた、蔑みでも、哀れみでも、同情でも、好奇でもなく……。
ただ、憂いた瞳がゆっくりと伏せられる。
「あ、イヤ、ケイレキサショウしても調べたらすぐにバレるし、俺、ウソついても顔に出るんでスグ分かっちまうみたいなんデス！」
飛夢はめいっぱい、一生懸命明るく振る舞った。
何だか、この人にこんな哀しい顔をさせてしまった事を焦った。
「ふふ。君は優しいね」
オーナーの口元に微笑みが浮かぶ。
穏やかな、それでいていたわりの気持ちがあふれる瞳が飛夢に向けられた。
その瞳が深い碧であることに飛夢は、はじめて気づく。
また、口がぽかんとあきそうになるのを飛夢は必死に我慢した。
「……話の途中だったね……」
そう言ってオーナーの瞳が再び飛夢の履歴書に戻される。
「……フロアー希望なんだね。では……君はこの店がどんなサービスをする場所だと思っているのかな？」
「えっと……酒やおつまみを運んだり、女の人と話したり、それから……」
その後が続かなかった。
いや、本当は続けられなかった。
「……」
沈黙が答えの飛夢。飛夢が飲み込んでしまった言葉をオーナーが口にした。

「この店では『枕』……俗に言う売春はしないよ。そう言った風俗店ではないのだからね」
子供に言って聞かせるような、優しい口調が珍しく厳しくなる。
「ここは、『夢』を売る場所だ。覚えておきたまえ！」
「はい、店長！」
初めての厳しい言葉に飛夢は元気よく大きく頷いて答えた。
「結構。……ああ、恋愛は対象外だからね。それと……私の事は『雅人（まさと）』と呼んでくれて構わない。ここでは、お客様に緊張感を持たせないよう、役職名では一切呼び合わないようにしているからね」
「はい、マサト……さん？」
そう言って、少し照れながら許可を得るように、円（つぶ）らなくりくりの、茶目の強い瞳が自分を見上げる。
雅人はくすくすと笑った。
「いいだろう。一次は合格だよ」
「！、本当っスか？」
雅人の思わぬ答えに飛夢は飛び上がりそうになった。
そこまで話した時に、ふと雅人が自分のスーツの内ポケットに視線を落とす。
どうやら携帯が鳴ったらしい。
「……失礼。では後は頼んだよ」
そう言って、ショーンと櫂に目配せをして、バックヤードへと消える。
「おめでとうございます、飛夢君。……良かったですね」
そう言って櫂が本当に嬉しそうにこにことほほえみかけてくる。
「はい、ありがとうゴザイマス」
飛夢は引き留めてくれた櫂に心から感謝した。
「……これ、書いておけ」
ショーンは相変わらずぶっきらぼうにアンケート用紙のような紙とボールペンを手渡してくる。
その紙には、身長・体重から始まって、音楽の趣味や、酒や煙草の好みまで……。
履歴書には書かないプライベートな質問が並んでいた。
「……かなり込み入った質問になりますから、差し障りのない範囲で構いません。あ、何か分からないところがあったら何でも聞いてください」
櫂はそう言いながら、雅人のコーヒーを片付けていく。
いくつかの項目の後に、とある英語の項目で飛夢のペンがはたと止まってしまった。
『の……のーまる？……す、す、すとれーと？？』
意味の分かる単語がこれしかない上に、質問の意味が全く分からない。
髪型の事かと思ったが、コレは一応聞いてみた方が良さそうだ。
「あの、すみません、これ……質問のイミがわかんないんっスけど……」
後ろを向いている櫂に問いかけてみたものの、意外にも正面にいたショーンがその質問に答える。
「……お前の性癖を聞いてる」
「セーヘキって？」
「あの、ですね、飛夢君、琥珀の月（ここ）には、その……。そう言った男性のお客様もいらっしゃるんですよ」
「……なる……」
遠慮がちな櫂の説明に、妙に納得して頷く飛夢。
「もちろん、君は……」
「なら、NORMALとSTRAIGHTに〇をしておけ」
二人の薦めに飛夢は再度、素直に頷いた。
「はい、多分」
「「多分？」」

二人分の問いが自分に向けられる。
恥ずかしいが、飛夢は本音を語った。
「あ……俺、実は女の子とまともにつきあったことまだ無いんデス。ダチとつるんでる方が楽しいし……。ただ、話するだけだったら男の方がラクかも、デス。あ、デモ、教えてくれれば女の子ともちゃんと……」
一生懸命のアピールに櫂はくすくすと笑った。
「ああ、そうだ。せっかく入れたコーヒーが冷めてしまいますね。どうぞ」
そう言って櫂は再びコーヒーとチーズケーキを勧めてくれる。
「……チーズケーキはお嫌いですか？」
「イエ、俺、通知票で九年間『給食を残さず食べる』が『よくできる』だったのが自慢でした！」
そう言って元気よく挨拶をする。
「いただきます」
しっかり両手を合わせてから、飛夢はぱくりとケーキを口に運んだ。
「！！！　うんめえっ！」
何気に口に入れたチーズケーキは、今まで飛夢が口にしたどんなチーズケーキよりも美味かった。
柔らかい弾力のケーキは口の中に入れるとふわり、とろりとクリーミーに溶けていく。
決して甘すぎず、かといってチーズの味もしっかりと口に残る。もう一口、また食べて食感を楽しみたくなるケーキだった。
「うめっ、超うめっ！　本当（まじ）、うまっ」
飛夢は夢中でケーキをぱくつく。
「そうですか？　それは良かった……」
櫂は何故か少し恥ずかしげににこにこしている。
『どっかのデパ地下でいっこ五百円とかするケーキなんだろうなぁ、きっと……』
そう思って、恐る恐る聞いてみた。
「これ……どこのですか？」
飛夢の問いに、櫂は気恥ずかしげに
「……僕が作ったんですよ……」
と小さく答える。
「！　マジっスか？！」
飛夢は心から驚いて櫂の横顔を見つめる。
櫂はやはり気恥ずかしげにこくりと頷いた。
「すげー、いや、マジすごいっス、櫂さん。俺、こんな美味いケーキ、生まれて初めて食いました！」
感動と尊敬でキラキラ光るまなざしが櫂に向けられる。
「そんな、いくら何でも褒めすぎですよ？」
櫂はくすぐったげに飛夢の言葉を受け取る。
「いや、本当ですヨ、櫂さん。マジ、ウマいっス！」
「しゃべりはいいからとっとと書け」
とうとう、のどかな会話をショーンが打ち切る。切れ長の瞳がちらとアンティークな大時計に向けられていた。
時計の針はいつの間にか午後三時半過ぎを示していた。
「ああ、いけない、もうこんな時間ですか？　すみません、ショーン、後はお願いします」
櫂はそう言うと慌ててバックヤードに消える。飛夢も視線を紙に落とした。ショーンは腕を組み、それを見守っている。
最後にひとつ、どうしても聞いてみたい質問があった。
だが、聞きやすい櫂はもう居ない。
仕方なく恐る恐るショーンに聞いてみる。
「……あの……『入寮希望』って書いてるんですケド……寮があるんですか？」
「入るのか？」
ちろり、と視線が自分に流される。メゲそうになるのを必死に堪える。

「えと……今居るトコより安かったら……」
「水道・光熱費込みで月３万。ただし、５ＬＤＫをシェアだがな」
金額は……今の所よりも一万も安かった。
しかも、水道・光熱費込み！
背に腹は変えられない。
勢いよく〇をつけた飛夢を見て、ショーンは冷静に言葉を落とした。
「二次が受かったら案内してやる。求人は見ただろう？」
ショーンの言葉に飛夢ははっとする。
『そうだった！　まだ二次試験があったんだ……』
「二次は実技テストみたいなものだ」
そう言って、ショーンは二次試験の説明を書いた紙を飛夢に手渡す。
「その紙にも書いてるが、何か使う物があったら忘れずに持ってこい。時間は……」
そう言って、その紙の空欄に次の試験時間を書き加える。
「十七時だ。後二時間も無いが間に合うか？」
ショーンの質問に飛夢はこくりと頷いた。
一応、用意は全部してきたし、荷物は地下鉄のコインロッカーに預けてある。
「じゃあ、十七時にまたここに来い。いいな？」
「はいっ、ショーンさん！」
元気のいい飛夢の返事。
だが、ショーンの眉間には皺が寄る。
「俺を『さん』づけで呼ばなくていい。……良く効く防虫剤みたいだろうが」
その表情にはふと、照れのような微笑みが微かに浮かぶ。
「他に何か質問は？」
だが、それも一瞬で、もう一度飛夢が顔を見たときにはいつもの冷たい顔に戻っていた。
「あの……」
飛夢はすでに追い出しモードに入っているショーンにこわごわ聞いてみる。
「これ……全部食ってから帰ってもいいですか？」
そういって、まだ半分残っているチーズケーキとコーヒーを名残惜しそうに指さす。
「好きにしろ」
吐き捨てるように言ってから、ショーンもバックヤードに姿を消そうとした。
「……遅れるなよ？」
消え際に一言、そう念をおす。
飛夢は誰も居なくなったフロアーで、あっという間にケーキとコーヒーを腹に収めた。
「ケーキ、ごちそうさまでした！　また後で、ヨロシクお願いしマス！」
元気な声に櫂とショーンがバックヤードからフロアーに姿を現す。
だが、声の主はもう既に店には居なかった。
「ああ、全部食べてくれたんですね」
誉められたようにキレイにケーキが無くなっている皿を下げながら、櫂は嬉しそうににこにこしている。
「ああ。あいつ、俺に全部食って帰っていいかって聞いたぞ」
ショーンも、その様子を思い出し、おかしくてたまらない、というように櫂に話しかける。
「素直ないい子みたいですね」
櫂はうんうんと頷いて、かしこそうな瞳でショーンに問う。
「合格（うか）ると思いますか？」
「……雅人が気に入ってるみたいだから合格るだろ」

そう言って、二人はさっきまで飛夢のいた場所を見つめる。
何故か、光わたる五月の風を感じたような、爽やかな気分になっていた。